

サマンバヤ通信

サマンバヤの会 THE GROUP OF SAMANWAY
インドの子どものための教育のために
for Education to Every Child

CONTENTS

サマンバヤ通信 WEB 配信のお知らせ
せ/SEED BANK 始動/インドで話
そう/ナマステ・インドア特
集・イベント参加レポート1/舌
で感じるインド/インドにおける
JICA 事業の貧困対策について/
2007 年下期送金を完了しました



ナマステ・インドア 2007 の出展ブースにて (2007.9.29)

サマンバヤ通信 WEB での配信のお知らせ

サマンバヤ通信がサマンバヤの会のホームページからご覧になれるようになりました。
ホームページアドレスは以下のアドレスです。トップページから「会報」をクリックしてください。

<http://www.questions.gr.jp/samanway/>

「サマンバヤの会」で検索しても見ることができます。サマンバヤ通信発行の隔月第2土曜日以降数日以内に更新する予定です。早速、要チェック！お気に入り追加！

ホームページでは通信をカラーで見ることができます。写真の臨場感を味わうこともできます。PDF で掲載してあるので、ご自宅のプリンタでプリントアウトも可能です。今後も 100 号目指して発行していきますので、よろしくお祈りします。インドに関する寄稿もお待ちしております。

SEED BANK (シード・バンク) 始動

寺田文男 (TERADA Fumio)

2001年に始動したスモール・グラント。02年から05年まで述べ9件のサマンバヤ・アシラムの卒業生、またはサマンバヤ・アシラム元教師が軸となって活動しているNGOの申請に対して活動費の援助をしてきました。申請を受け付けるたびに個人からの要請があって(個人に対しては受け付けませんでした)NGOに限らず卒業生全般に恩恵のある仕組みを考えることにしました。スモール・グラントにあっては彼らの社会的影響が地域に対して大きいなどの理由で「給付」してきましたが、新たな仕組みは「卒業生及び元教師などの関係者」全般を対象ですので「給付」という形をとると、限られた給付金、個々の事情、給付の公平性、等々收拾がつかなくなることでしょう。低利息の金融というか個人むけ貸し出し銀行のような組織ができれば理想的ですが、そのために費用のかかる専従者を置くわけにもいかず、どうしたらいいものか具体策に苦慮していました。

スモール・グラントの給付を受けていたNGOを運営している卒業生たちが運営を買って来てくれたのがSEED BANK(シード・バンク)です。マイクロクレジットのように貸付を希望する人にそれぞれ必要なお金を審査を経て貸し付け回収までするというのが構想

でした。この機構を運営するとしたら労力のいることだろうと思っていたのですが、彼らが快く引き受けてくれたので、この8月にサマンバヤの会からということで、資金を託しました。今回の資金は400USドルでした。

すると、早速SEED BANKが開店し、報告が入ってきました。

こちらの心配をよそに、6人ほどの有志が手弁当で集まり、簡単に運営されていました。融資希望者の中から4名を決定(各100ドル)、利息なし、馬鈴薯収穫時と小麦収穫時の2期で返済、返済完了時に次年の4名に貸し出しを決める。というものでした。種を買う資金を貸し付け、収穫時に返済とするもので、極めて高い回収率が見込まれます。単純化して早い決定に手際の良さがうかがえますが、その背景に種を買う資金を待っていた現状があるということを確認させられました。広い意味での「SEED」(資本金とか)と解釈していましたが、そのまま「SEED」(種)が必要だったのです。SEED BANKは種を買うための融資をする銀行として機能するでしょう。今後は、天災などによる返済の遅れ、焦げ付き、あるいは返済金の一時保管方法など、課題は出てくるでしょうが、試みとしてのSEED BANK、毎年資金を少しずつ足して実用的で円満な仕組みとして活用されることを期待しています。以後も折に触れ報告をいたします。

インドで話そう

NO. 3

大畑朝義 (OHATA Asayoshi)

آداب عرض

アーダーブ アルズ

こんにちは(礼をつくします)

今回は、ウルドゥー語です。

ウルドゥー語はパキスタン(総人口1億2,600万人)

の国語ですが、母語人口は総人口のわずか8%にすぎない1,011万人。インドではジャンムー・カシュミール州の公用語となっていて、他にもウッタラプラデーシュ、ビハールの北部諸州と南部のアーンドラプラデーシュ州などに少なく見積もっても約4,200万人の話者がいます。ウルドゥー語の話し手やこの言語を理解する人々は、宗教・民族の枠を超えてインド亜大陸全域に分布しています。にもかかわらず、ウルドゥー語だけが話されている地域はどこにもありません。また、このように広範な地域に分布しているにもかかわらず、方言差がほとんどないことも大きな特徴のうちの1つです。

ウルドゥー語を書き表す文字はアラビア文字28文字に4文字を加えたペルシア文字32字に、さらに反り舌音を表すための3字を追加した合計35字から成り、ナスターリーク書体が用いられ、右から左に書きます。上記の文字は実際に右から左に私が書いたのですが、右利

きだと文字が隠れていってしまうのでとても書きにくく、左利きの人の気持ちがよく分かりました。

文字だけを見ると、インドでも使われているとは想像しにくいのですが、ウルドゥー語はヒンディー語と同系の言語で、言語学的には同一言語の方言、社会的変種に属すそうなので、表記法は異なるのですが文法や基本語彙は同一であるため、多くの場合相互に理解可能だそうです。(参考文献：世界ことば小事典)



今年で 15 回目を迎えるこのイベントは、今年は日本とインドの文化交流 50 周年を祝って特に大きな催しとなった。このイベントにサマンバヤの会も初めて参加することになった。

さまざまな店が出店し、インド人が料理した本場のインド料理が味わえた。その他 物販などをあわせると 50 店ほどが代々木公園の一角に集まり賑わいを見せた。ステージの上ではバングラデシュのカラフルな衣装のダンス、インド古典舞踊、ボリウッドからのポップなダンス、ラジャスタンからのダンスが続けざまに披露され、雨にもかかわらず多くの人垣でステージがまったく、見えないほどだった。巨大なテントが設けられた「インドセンター」の中はインド式の会場となっており、多くの人がヨーガ、インドのカラオケ、IT レクチャーなどを楽しんでいた。

私がインドに行ったのは約 2 年前、驚かされたのは街の汚さである。インド人はそこらへんにゴミをポイポイ捨てる。しかし、今回のフェスティバルではそのようなこともなく、きちんとゴミが分別してすてられていた。



サリーを販売しているブース。
日本人だけでなく多くのインド人が訪れていた。

ナマステ・インディア 2007 特集

2007 年 9 月 29 日(土)・30 日(日)に渋谷区代々木公園内で「ナマステ・インディア 2007」というイベントが開催されました。サマンバヤの会では久しぶりに、この種のイベントに参加しました。当日は東京農業大学の学生たちが手伝ってくれ、サマンバヤ通信の配布やサマンバヤの会の説明を行いました。今回はそのレポートです。



イベント参加レポート 1

鹿糠智子 (KANUKA Tomoko)

9 月 29 日、30 日とナマステ・インディア 2007 が開催された会場の代々木公園は、雨が降り続く中、日本、インドばかりでなく、様々な国の人でにぎわった。NPO 日印国交樹立 50 周年記念事業であるナマステ・インディアはインドに行かなくてもインドの音楽、食べ物、文化を味わうことのできるインド関連のイベントとしては日本最大のイベントである。



細かく分別されるゴミ捨て場

NPO,NGO の団体は意外に少なく、メインはレストラン、民芸品、衣料などの販売のような印象を受けた。ほかの NGO ブースをまわり、資料を配っていたのが、多くの人がインドに行き魅せられて同じような思いをもっているということだった。

となりでブースを開いていたバクティ・ヨガ・センターの方に話を聞いてみると、昔、インドにヨガで留学していた経験を持ち、それを生かし静岡で教室を開いているとっていた。ほかに、インドに行ってその文化・伝統の良さを日本に持ち帰り、伝えている人たちが多くいた。

今年、日印文化協定 50 年を迎え、日本人のインドに対する関心が高まっていると感じた。

もっと多くの人にインドの文化の良さを伝え、まずはインドを好きになってもらう、そこから国際協力でも国際交流も深まるのではないかと思った。



サマンバヤの会のブースを訪れるインド人。
日本語がとても上手だった。



舌で感じるインド

～ナマステ・インディア 2007 編～

大畑朝義 (OHATA Asayoshi)

今回は、ナマステ・インディア 2007 でお店を出店していたインド料理屋マハラジャのドーサを紹介します。ドーサとは南インドで食べることのできるインド料理で、私は南インドのチェンナイにいたときに食べたことがあります。クレープに作り方も見た目も似ているのですが、強火で作っているのか、でき上がりは生地の外側は歯ごたえがあってパリパリしていて、中はしっとりという風になります。そして、この生地の中にはジャガイモと豆をスパイスで味を付けて煮たようなものが入っていて、これを生地と一緒に食べるとパリパリ、ホクホクっといった感じで絶品です！また、このドーサには写真右上にあるサンバルと呼ばれる

辛いスープと甘味が無く酸味強いヨーグルトのようなものが付いているので、辛くなくても口直しをしながら食べることができたので、あっという間に美味しく完食することができました。辛いものが多いインド



料理ですがヨーグルトという名脇役がいるおかげで、辛いものが苦手な私にとってはとてもありがたい料理でした。

インドにおける JICA 事業の重点分野である 貧困対策について

大畑朝義 (OHATA Asayoshi)

去年の3月に JICA インド事務所次長の伊東耕三さんにお聞きしたお話を前回に続いて、報告いたします。

インドという国を考えたとき、13億人もの人口を抱えるこの大国の貧困を救うには援助という形では不可能に近いと思います。13億の人間全員が裨益するような援助を行うのはとても難しいことです。しかし、小国の場合だと話しは違ってきます。インドの隣の国ブータンにおいては、約90万人の人口に対して日本のODAのJICAが行う技術協力の経費はインドとほぼ同じ額の10.70億円(2004年度)が投入されています。ブータンではJICAの活動が国民の生活に溶け込んでいて、ブータンの国民のほぼ全員がこれらの援助を受けています。これに対して大国のインドに10億円では直接的な効果は望めません。しかし、これ以上のお金を出すこともできない状況です。

このような状況下で JICA はインドにどのようにして援助を行えばいいのか、少ないお金で将来を見据えたプロジェクトはどのようなものか、結果的に、即効性のあるプロジェクトを一箇所集中で行うのではなく、効果が次第に現れてきて、持続性があるような援助を広範囲に行っていくことを選択したとのことです。

現在インドで行われている JICA の事業実施計画では、(ア) 貧困対策(主に、保健医療、農業農村開発)、(イ) 経済改革支援/インフラ整備、(ウ) 環境保全の3つを重点分野として協力を実施しているようです。

この貧困対策の案件には現在、8つあり、これらのプロジェクトは内容別(スキーム別)にて5つのカテゴリーに分けられます。専門家派遣、研修事業、機材供与(機械や資材を相手国にあげること)、この3つを組み合わせたような昔はプロジェクト奉仕技術協力と言っていた技術協力プロジェクト(技プロ)、そして、近年増えつつある草の根技術協力があります。

上記の貧困対策、経済改革支援、環境保全の支援3本柱の1つとなっている貧困対策の中では、特に様々なプログラムアプローチが展開されています。

ただし、この際、重要なのは、いくつかの計画をバラバラに行わないということです。いろいろなプロジェクトを連携づけて、複合的に行うことで、より効果を高めようという方針をとっています。

その理由の1つには、1箇所に集中して援助を行うと、相手に援助する国や団体に対する依存する気持ちを持たせてしまい、自立していく力を大きく損なわせてしまうという危険性があるということです。

そこで、お互いの経験を共有するという取り組みを、今ではかなり力を入れて行うようにしているとのことです。

例えば、貧困対策の農民の生計向上プログラムには4つの案件があるのですが、その中に技プロの養蚕普及強化計画¹というのがあります。これは、実施期間が2002年から2007年なのですが、実は以前のフェーズも合わせると10年以上も続いているプロジェクトで、今ではインドにおける養蚕はかなり確立したものになってきています。

この「養蚕」事業とJABIC²が円借款で行っている植林事業のプロジェクトの中に「養蚕」事業を取り入れることで、従来の動きと連携を図ったのです。

さらに、日本のアジア学院というNGOと一緒にウツルプラデーシュのアラハバードのアラハバード農業大学校で自然農法を学んでいる人たちと一緒にいる草の根技術協力の中でも同様な「養蚕」事業との連携を行いました。

“北インドの小規模農民のための持続可能な環境保全型複合農業の普及システムの構築と草の根パイロット事業プロジェクト”という長い名称のプロジェクトでも「養蚕」事業を取り入れたとのことです。

¹ サマンバヤ通信77号を参照(ホームページで)

² JBIC(国際協力銀行)は、日本の特殊法人・政策金融機関の一つ。一般の金融機関と競争しないことを旨としつつ、わが国の輸出入もしくは海外における経済活動の促進または国際金融秩序の安定に寄与するための貸付け等ならびに開発途上にある海外の地域の経済および社会の開発または経済の安定に寄与するための貸付け等を行い、もってわが国および国際経済社会の健全な発展に資することを目的としている。

養蚕というのは蚕を育てて繭を取ります。つまり蚕は虫なので、闇雲に桑の葉をたくさん取ればいいということで防除を行ったら、その桑を食べた蚕は死んでしまいます。だから、自然農法でやるしかありません。このようにして、養蚕の計画が他の計画にも生かされているのです。

近年、案件が増えつつある草の根技術協力は、JICA と日本の NGO や NPO とが数年間の契約をして、1年間で何千万円かの上限で、それぞれの途上国で NGO に技術協力をしてもらおうというものです。今までの農業分野における技術協力では、農水省などの人的資源を使う「官」が主体の協力でした。しかし今では、コンサルタント会社の専門家や NGO や NPO などの「民」= 民間による草の根技術協力が次第に増えてきているそうです。

NGO などと一緒に技術協力をする場合、NGO には「現場主義」という柔軟性が求められます。しかし、日本の税金を使って行っているのだから、ある程度現地で事業を実施していて、経験があり、実績がある NGO を厳選します。

草の根技術協力の1つ目は前述したアジア学院と一緒に進んでいるプロジェクトです。アジア学院は約20年間アラバードの農業大学で活動しているという実績がありました。

そして、2つ目はソムニードという NGO と JICA が契約をして行っている「都市近郊農村部とスラム女性自助グループの連携による新たな産直運動構築と自立のための共有財産創出」というプロジェクトです。

このプロジェクトはアンドラプラデーシュ州のビシャカパトナムで約6年間続いています。これは都市近郊農村部の女性自助グループをエンパワーすることで、生産と消費の新たな関係を構築し、それを通してスラムコミュニティの共有財産を創出するための活動を行っています。インドにはセルフヘルプグループ (SHG) というのがあり、ジェンダー問題に取り組むときに一般的に使われる言葉で、女性を組織化してそこに資金をある程度投入して、それを女性グループが自己運営して自分たちの生活向上に役立てていくというものです。

3つ目は、まだ始まったばかりの「インド・グリーンハウスコミュニティ」というプロジェクトで

す。これは宮崎国際ボランティアセンターと連携して行っています。NGO がインド人を日本で研修をさせます。その人たちは帰国後、西ベンガルのカリボンでさまざまな換金作物を作っているのです。

また、JICA は地域の農家の現金収入拡大・地域経済活性化のため、各種花卉類、野菜類の栽培技術、野菜類の加工技術の普及・定着、加工品の販路拡大も支援しています。

感染症対策プログラムに関してはコルカタで実施されている「下痢症対策プロジェクト(フェーズ2)」というものがあります。

実はインドでも下痢が蔓延しています。抗生物質の過剰な投与などで耐性を持った病原菌が発生したりして、どんどん新しいタイプの病気が広まっています。そして、それに素早く対応するために遺伝子分析などの先端技術を駆使することで、最も下痢にかかりやすい最貧困層の人々が安価な注射で簡単に治療することができるようになりました。

感染症対策プログラムでは下痢疾患の対策技術の強化を図りながら、研修等を通してインド全国に普及することを目指しています。

同じ医療系でリプロダクティブ・ヘルス (RCH) 支援プログラムというも行っています。RCH というのは母子保健という意味で、インドでは出生率が高く、しかも、幼児の死亡率も高いため、母子の健康に不安な面が多々あります。技術協力プロジェクトの「リプロダクティブ・ヘルス向上及び女性のエンパワーメント支援」というプロジェクトでは、



JICA 事務所を示す看板

インド政府による RCH 及び子供の健康プログラムの州内での広域展開のための実施計画の策定を行い、州内のパイロット地域における RCH サービスの質の向上を支援し、利用の増加を目指しています。

マディヤプラデーシュ州でパイロット地域を選んで、モデル的なプロジェクト展開を行い、これがうまくいったら、州が引き継いで行う予定です。

そのお金を JABIC、あるいは世界銀行が負担しているとのこと。

同じ RCH 支援プログラムの中に " インド北部ウッタランチャル州における衛生環境改善・地域住民意識化支援事業 " というのがあります。これは草の根技術協力で行われており、「地球市民の会かながわ」と連携した事業です。

この実施場所のウッタランチャル州チャモリ郡はものすごい山の中で、対象地区の小学校 40 校の生徒とその家族、教師、地域住民の保健・衛生に関する意識の向上を促進し、清潔な生活が習慣化され、衛生環境が改善されることを目指した支援を行っています。これには WFP³ からの食料援助 (Food For Study) が入っていて学校給食を支給することで、子どもが学校に行くようになり、子どもの栄養状態もよくなることを目的としています。そして、学校に来てくれた子どもたちに対して衛生教育を行います。例えば、学校にトイレを作るだけでなく、ほとんどの子どもたちはトイレの使い方を知らないの、教えたりします。

貧困対策の最後の案件は、災害復興支援プログラムで " グジャラート環境衛生改善 " というプロジェクトです。これは技プロにおけるローカル NGO 等の活用という内容で行われています。これは 2001 年 1 月、グジャラート州において発生した大規模な地震の災害復興支援プログラムの一環として、グジャラート州の対象地域 (14 村) において、農村最貧困層の生活改善のために、安全な水の供給、適切な生活排水処理にかかる協力を実施しています。これはアガカーン財団というパキスタンに本部がある NGO と一緒にしています。

ここまでに挙げたように、近年、貧困対策におけ

る案件では草の根技術協力が多くを占め、NGO や NPO の活躍が大いに目立っているそうです。これは貧困対策などに取り組む場合、現地のことを知り尽くしている NGO などが取り組んだ方が政府よりもうまくいく場合が多々あるからです。例えば、養蚕普及強化計画においても蚕が食べる桑の作り方というのは、JICA がこの計画を始める前に民間で自然な形で勝手に普及してしまったのです。つまり、モデルとして試された少数の農家がとてもうまく蚕を飼っているのを周りの人たちが見て、政府とは関係のないところで人から人へとたちまちの間に広まっていったのです。

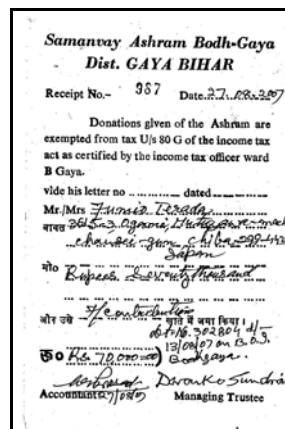
このようにして、現在インドでは政府主導で民間の力が存分に発揮され、インドの貧困問題解決に立ち向かっている様子が見えてきます。

2007 年下期送金を完了しました

2007 年 8 月 13 日に Bank of INDIA 東京支店発行の送金小切手により送金を完了しました。サマンバヤ・アシュラムに対して 25 名分 (昨年下期実績マイナス 10 名) の養育費で、現在登録されている里親会員 25 名分プラス寄付という形にしました。(25 名 × Rs.2,600 - (半年分) Rs.65,000 -) + (寄付として Rs.5,000 -) = Rs.70,000=212,800 円が今期の送金額です。

里親会員 25 名分の名簿とともに送付しました。当日レートは 1 ルピー = 3.04 円でした。

9 月 4 日、サマンバヤ・アシュラムから領収書が送られてきました。同封の手紙に " 何年もの間、養育費を送り続けてくださる会員に皆様に心より感謝をしていますとお伝えください " とありましたことを報告しておきます。



³ WFP 国連世界食料計画は国連唯一の食料援助機関であり、かつ世界最大の人道援助機関である。2002 年、WFP 学校給食の受益者数は 64 カ国、1559 万 9459 人にのぼり、うちインドでは約 170 万人の子どもたちが支援を受けた。

サマンバヤの会とは

当会はインド・ビハール州にあるサマンバヤ・アシュラムが行う主にアウトカーストの子どもの教育のために、里親という形で資金援助をする窓口として活動している会です。里親といっても日本に子どもを連れてきて養育するわけではありません。養育費をサマンバヤ・アシュラムへ送金することを意味します。養育費はアシュラムの財政の中に繰り込まれ、その中から子どもたちのための諸費用が使われるという仕組みです。

貧しい家の子どもの教育を寄宿制で始めて30年以上が経った現在でもこの「学校」への大きな期待があります。4～10歳ほどの子どもが数年間、寄宿制で基礎教育を無償で受ける、その費用を外国からの里親による寄付で賄っています。そして、かつてこの学校で教育を受けた「卒業生」たちの中には慢性的貧困者も少なくなく、彼らの生活向上のための手助けができないものかと活動をしています。2002年から2005年、「卒業生」が活動するNGOへの資金援助スモール・グラント。2007年からサマンバヤの会からの資金を「卒業生」たちが委員会を作り手弁当で運営している資金貸し出し組織SEED BANK。サマンバヤの会は、サマンバヤ・アシュラムとその仲間たちへの生活向上のための資金援助、サマンバヤ通信の発行、世界に目を向ける姿勢、を大切にしている会です

サマンバヤ・アシュラムとは

サマンバヤ・アシュラムはガンディー翁の高弟の1人、ビノーバ翁が創設し、その弟子の1人であるドワルコ・スンドラニ氏が中心となり、その運営にあたっています。インドには「アシュラム」という組織があります。アシュラムとはヒンディー語で直訳すると「同等の仕事」となりますが、「精神修養の場」とか、ある種のセンター的役割を担う組織を指したりします。サマンバヤとはヒンディー語で「調和」とか「融合」などを意味します。英語では「harmony」にあたります。つまり、サマンバヤ・アシュラムは「調和のための修養道場」となりますが、インドの、そして地球に住む全ての人類の調和を目指す研修施設と言えるでしょう。サマンバヤ・アシュラムでは、子どもの教育こそが未来のインドの開発のためになるという考えの上に立ち、身分制度の為に抑圧されているハリジャン（不可触民）の地位向上のために、その子弟の教育に重点を置いています。

入会案内

里親会員

サマンバヤ・アシュラムが養育する子どもの資金を援助します。

里親会員に登録されますと、サマンバヤ・アシュラムは養育すべき子どもをサマンバヤ・アシュラムに連れてきて養育を始めます。

5年間はその子どもの養育費を里親会員が保証することとなります。

お支払い方法 5年一括 120,000円
 一年ごと 24,000円
 半年ごと 12,000円

いずれかの方法でお支払いください。

会費のうち、1年あたり1,4000～1,5000円（120USドル相当）をサマンバヤ・アシュラムに送金し、残りをサマンバヤの会の運営費用に充てます。サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

賛助会員

サマンバヤの会の活動を資金面で支え、応援していただきます。

会費は1口5,000円/年で、サマンバヤの会の運営費用に充てます。

サマンバヤの会からサマンバヤ通信を送付します。

入会方法

入会のきっかけ、経緯、電話番号、さしつかえなければ職業、Miss,Mr,Mrs,Msを記入して入会申し込み書として本部宛に郵送またはFAXしてください。

会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。

入会の確認がされたことを通知します。

会員証は発行していません。

継続の場合

会員として継続される場合

会費を郵便振替または現金書留にて送金してください。

入会の確認がされたことを通知します。

退会

会を退会する場合、速やかに文章で（郵送またはFAX）お送りください。但し、里親会員で会費未納分については請求する場合があります。

郵便振替口座 番号 00260-3-15712

名称 サマンバヤの会 宛

編集後記

大学のプログラムで沖縄の宮古島に行ってきました。北緯24度に位置する宮古島とだいたい同じ緯度にあるインドの町はベナレス（バラナシ）です。台風が来ていましたが最終日には台風一過で晴れ渡り、インドにも負けないほどの暑さで、真っ黒に日焼けしてきました。 O.A.

発行：2007/10/13（隔月第二土曜日）
 発行人：サマンバヤの会
 本部：〒299-4423 千葉県長生郡睦沢大上 3615 - 3
 TEL-FAX：0475 - 40 - 9795
 東京事務所：〒113-0033 東京都文京区本郷 5 - 1 - 16
 NP- ビル5F 東大教育研究所内
 TEL：03-3815-3035 FAX：03-3818-1219